「飯島耕一の出発—詩集『他人の空』を中心として」発表資料　　中原 豊

Ⅰ.詩集『他人の空』書誌

オリジナル詩集			初出					再出												備考
タイトル	〈エピグラム他〉／［献辞］	ノンブル	誌名	巻号	通号	発表年月日	原題	T01	T02	T03	T04	T05	T06	T07	T08	T09	T10	T11	T12	
目次																				
吊るされた者の木版画に	〈ヴィヨン〉	7							○	○	○		○	○		○	○	○	○	
	〈富永太郎〉									○										
他人の空（中扉）										○					○					T08では目次に記載されているのみ。
他人の空		8	詩行動	3(10)	23	1953年10月01日_	すべての戦いの終わり Ⅰ他人の空	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	「すべての戦いの終わり」については下記のA、B、Cの3パターンがある。
砂の中には		10				1953年10月01日_	すべての戦いの終わり Ⅱ砂の中には…	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
世界中のあわれな女たち	〈J・シュペルヴィエル〉	12				1953年10月01日_	すべての戦いの終わり Ⅲ世界中のあわれな女たち	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
空		16	詩行動	3(9)	22	1953年09月01日_	空と汗 Ⅰ暁のレクイエム	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	
牡牛よ	［メフイストテレス］	17	詩行動	2(1)	2	1952年01月01日_	月明の下で		○	○	○		○	○		○	○		○	初出に「中島達夫に」の献辞がある。
埃まみれの空	［金太中］	20	詩行動	3(9)	22	1953年09月01日_	空と汗 Ⅰ暁のレクイエム Ⅱ汗ばんだ掌	○	○	○		○	○	○		○	○		○	
行列	〈ロオトレアモン〉	22	詩行動	3(6)	19	1953年06月01日_	路々	○	○	○		○	○	○		○	○		○	T10に再録された際に「路」と改題。
血について	［安東次男］	24	詩行動	2(11)	12	1952年10月01日_	秋の日の思想	○	○	○		○	○	○		○	○		○	
			現在		3	1952年10月15日_														
霧	〈ある気象台長〉	26						○	○	○		○	○	○		○	○		○	
死人の髪		28						○	○	○		○	○	○		○	○		○	
切り抜かれた空（中扉）										○					○					T08では目次に記載されているのみ。
理解	〈P・エリエアール〉	32						○	○	○		○	○	○		○	○	○	○	
大きすぎる荷物	［難波律郎］	34							○	○			○	○		○	○		○	
切り抜かれた空		36							○	○	○		○	○		○	○	○	○	
帰つてきた子供たち		38							○	○	○		○	○		○	○		○	
思い出された村		40						○	○	○		○	○	○		○	○		○	
見る		43							○	○			○	○	○	○	○	○	○	
一回		44							○	○			○	○		○	○		○	
探す		45							○	○			○	○	○	○	○	○	○	
途		46							○	○			○	○		○	○	○	○	
影を背中につけた動物たち	［三木稔］	48	詩行動	2(3)	4	1952年03月01日_			○	○			○	○		○	○		○	
言葉について		53	詩行動	2(8)	9	1952年08月01日_		○	○	○		○	○	○		○	○		○	
あとがき		57								○										
								B	C	A	C	B	C	C	C	C	A	A	A	

A＝本文末尾に〈すべての戦いのおわり　Ⅰ～Ⅲ〉
B＝総題「すべての戦いのおわり」1～3
C＝〈すべての戦いのおわり　Ⅰ～Ⅲ〉なし

	編著者	題名	出版社	刊行年月日	備考
T00		他人の空	書肆ユリイカ	1953年12月15日_	
T01	野間宏／著，安東次男／著（ほか）	戦後詩人全集　4	書肆ユリイカ	1954年12月_	
T02		今日の詩人双書6　飯島耕一詩集	書肆ユリイカ	1960年01月_	「覚え書」
T03	吉岡実／著，谷川俊太郎／著（ほか）	現代日本名詩集大成　11	創元社	1960年09月10日_	
T04	飯島耕一／著，岩田宏／著（ほか）	現代詩大系　7	思潮社	1967年12月01日_	「自作を語る」
T05	嶋岡晨，大野順一，小川和佑編	戦後詩大系　Ⅰ	三一書房	1970年09月30日_	
T06		飯島耕一詩集　1　他人の空	山梨シルクセンター出版部	1971年10月20日_	「あとがき」
T07		現代日本文學大系93　現代詩集	筑摩書房	1973年04月05日_	
T08	大岡信 編	日本現代詩大系　13	河出書房新社	1976年07月15日_	
T09		新選現代詩文庫103　新選飯島耕一詩集	思潮社	1977年06月01日_	
T10		飯島耕一詩集　1	小沢書店	1978年01月15日_	
T11		現代の詩人10　飯島耕一	中央公論社	1983年10月10日_	「自作について」「年譜」
T12		飯島耕一・詩と散文　1	みすず書房	2000年10月05日_	「作品ノート」「自筆略々年譜」

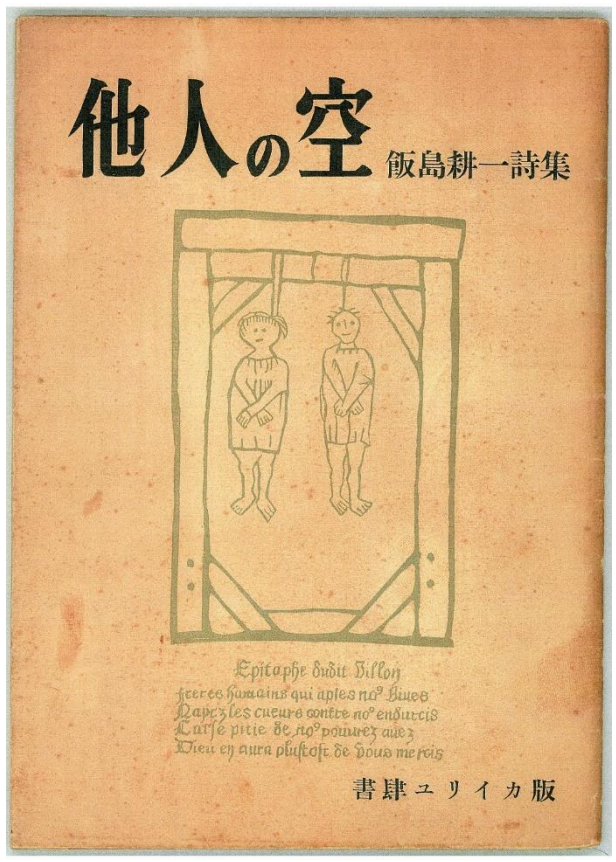
Ⅱ. 飯島耕一著作目録(稿)1951 年～1953 年

発表年月日		編著者	題名	発表誌			出版社
1951年	12月01日_	ピエール・エマニュエル／飯島耕一訳	#ピエール・エマニュエル詩集『自由はわれらの歩みを導く』序文より（一九四六年刊）	詩行動	1(1)	1	詩行動社
	12月01日_	飯島耕一	夜	詩行動	1(1)	1	詩行動社
1952年	未詳	飯島耕一	塑像	東京大学新聞			
	01月01日_	ジュール・シュペルヴィエル／飯島耕一訳	#ジュール・シュペルヴィエル『詩人をめぐつて』より（詩集『誕生』一九五一年刊・附録）	詩行動	2(1)	2	詩行動社
	01月01日_	飯島耕一	月明の下で ★	詩行動	2(1)	2	詩行動社
	01月01日_	飯島耕一	＊雑記	詩行動	2(1)	2	詩行動社
	02月01日_	飯島耕一	蜥蜴	詩行動	2(2)	3	詩行動社
	03月01日_	飯島耕一	影を背中につけた動物たち ★	詩行動	2(3)	4	詩行動社
	04月01日_	飯島耕一	＊金子光晴論	詩行動	2(4)	5	詩行動社
	05月01日_	飯島耕一	影を背中につけた動物たち	詩行動	2(5)	6	詩行動社
	06月01日_	飯島耕一	橋とアルルカン	詩行動	2(6)	7	詩行動社
	07月01日_	飯島耕一	ビルの屋上での朝の歌	詩行動	2(7)	8	詩行動社
	08月01日_	飯島耕一	言葉について ★	詩行動	2(8)	9	詩行動社
	09月01日_	飯島耕一	＊選ばれた態度	詩行動	2(9)	10	詩行動社
	10月01日_	飯島耕一	＊中原中也小論	詩行動	2(11)	12	詩行動社
	10月01日_	飯島耕一	秋の日の思想 ★	詩行動	2(11)	12	詩行動社
	10月15日_	飯島耕一	血について ★	現在		3	現在の会
	12月30日_	飯島耕一	言葉について	詩学年鑑 1953年版	7(12)		詩学社
1953年	01月01日_	飯島耕一	言葉について	詩行動	3(1)	14	詩行動社
	02月01日_	飯島耕一	船尾につづく白い水尾 いささか前世紀風に	詩行動	3(2)	15	詩行動社
	04月01日_	飯島耕一	水兵記	詩行動	3(4)	17	詩行動社
	05月01日_	アンリ・ミショオ／飯島耕一訳	#アルフアベツト（エグゾルチスム）	詩行動	3(5)	18	詩行動社
	06月01日_	飯島耕一	路々	詩行動	3(6)	19	詩行動社
	07月01日_	飯島耕一	＊現代詩の再生	詩行動	3(7)	20	詩行動社
	09月01日_	飯島耕一	空と汗（Ⅰ暁のレクイエム Ⅱ汗ばんだ掌 Ⅲゆうぐれの印刷女工のレシタチイヴ Ⅳ海豚の夢） ★	詩行動	3(9)	22	詩行動社
	10月01日_	飯島耕一	すべての戦いの終わり（Ⅰ他人の空 Ⅱ砂の中には… Ⅲ世界中のあわれな女たち） ★	詩行動	3(10)	23	詩行動社
	11月01日_	アンリ・ミショオ／飯島耕一訳	#単純さ	詩行動	3(11)	24	詩行動社
	12月01日_	無署名（児玉惇、飯島耕一、平林敏彦）	＊それぞれの渦流から、河へ—『詩行動』二年度の歩み—	詩行動	3(12)	25	詩行動社
	12月15日_	飯島耕一	『他人の空：飯島耕一詩集』				書肆ユリイカ
			★＝『他人の空』収録				
			#＝翻訳				
			＊＝評論				

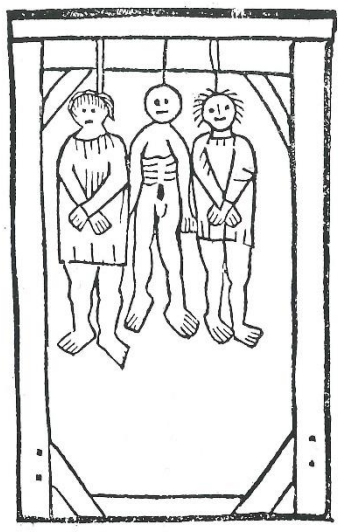
Ⅲ. 『他人の空』参考文献目録（稿）

	編著者	題名	所収				発表年月日	備考
S01	金太中	同人の顔（3）飯島耕一	詩行動	2(3)	4	詩行動社	1952年03月01日_	
S02	村野四郎	（『他人の空』書評）	東京新聞					未確認。年譜（『現代の詩人10 飯島耕一』1983.10.20 中央公論社）による。
S03	中村稔	（『他人の空』書評）						
S04	大岡信	書評 飯島耕一詩集 他人の空	詩学	9(3)		詩学社	1954年03月_	
S05	金太中、難波律郎	〈書評〉飯島耕一詩集・他人の空	今日		1	書肆ユリイカ	1954年06月01日_	
S06	安東次男	飯島耕一の詩	今日		2	書肆ユリイカ	1954年10月01日_	
S07	岩田宏	飯島耕一論	今日の詩人双書6 飯島耕一詩集			書肆ユリイカ	1960年01月_	
S08	鮎川信夫	解説	現代詩大系 7			思潮社	1967年12月01日_	
S09	岡田隆彦	飯島耕一論	現代詩文庫10 飯島耕一詩集			思潮社	1968年07月01日_	
S10	小川徹	飯島耕一における詩と真実						
S11	清岡卓行	飯島耕一の詩	抒情の前線			新潮選書	1970年03月30日_	
S12	山口雄二	詩とそれを教室で読むという行為—飯島耕一「他人の空」の授業を終わって—	日本文学	20(6)		日本文学協会	1971年06月01日_	
S13	工藤信彦		現代詩の解釈と鑑賞事典			旺文社	1979年03月_	
S14	郷原宏	現代詩の110人を読む	國文學：解釈と教材の研究	27(6)		學燈社	1982年04月_	
S15	平出隆	鑑賞	現代の詩人10 飯島耕一			中央公論社	1983年10月10日_	
S16	黒井千次	黒い空の旅人						
S17	鮎川信夫、吉本隆明	戦後詩を読む	詩の読解			思潮社	1985年11月01日_	
S18	高柳誠	廃墟の〈空〉からの出発—飯島耕一『他人の空』試論	論叢	(29)		玉川大学文学部	1989年03月_	
S19	大岡信	飯島耕一・詩のありか 1	飯島耕一・詩と散文 1			みすず書房	2000年10月05日_	
S20	辻一郎	飯島耕一『他人の空』について—空の語をめぐって	旭川国文		18	北海道教育大学旭川分校国語国文学研究室	2003年03月31日_	
S21	北川透、吉田文憲、野村喜和夫、蜂飼耳	戦後詩、二人の問いかけ	現代詩手帖	57(2)		思潮社	2014年02月01日_	
S22	岡井隆	飯島耕一、辻井喬を悼む						
S23	中村稔	開花と成熟 インタビュー						
S24	新倉俊一	治癒としての詩						
S25	嶋岡晨	飯島耕一の〈空〉へ						
S26	天沢退二郎	飯島耕一さんを遠くから送る言葉						
S27	井川博年	「下井草の若い詩人」						
S28	建畠晳	比喩の両義性 飯島耕一へのイマージュ						
S29	平林敏彦、三浦雅士	戦後詩のコアはどこにあるのか 詩誌「今日」という出発の場所から						

●表紙



①



Epitaphe dudit Villon
Freres humains qui apres nos viues
Nayez les cueurs contre nos endurcis
Car se pitie de nous pouurez auez
Dieu en aura plustost de vous mercis
Vous nous voies cy ataches cinq six
Quãt de la char q̃ trop auõs nourrie
Elle est pieca deuouree et pourrie
Et nos os deuenõs cẽdres et pouldre
De nostre mal personne ne sen rie
Mais pries dieu que tous nous vueille
le absoulydre g iii.

ルヴェ本(最初期刊本)から．
「絞首罪人のバラード」冒頭部

②

Epitaphe dudit Villon
Freres humains qui apres nos viues
Nayez les cueurs contre nos endurcis
Car se pitie de nos pouurez auez
Dieu en aura plustost de vous mercis
Vous nous voies cy ataches cinq six
Quãt de la char q̃ trop auõs nourrie
Elle est pieca deuouree et pourrie
Et nos os deuenõs cẽdres et pouldre
De nostre mal personne ne sen rie
Mais pries dieu que tous nous vueille
le absoulydre g iii.

La Ballade des Pendus
(gravure sur bois d'une des plus anciennes éditions de Villon, 1490)

③

Dieu en aura plustost de vos mercy
Vous nos voies cy ataches cinq six
Quãt de la charq̃ trop auõs nourrie
Elle est pieca deuouree et pourrie
Et nos os deuenõs cẽdres et pouldre
De nostre mal personne ne sen rie
mais pes dieu q̃ tos nos vueille absoudre
Ses freres vos clamõs. pas ne deue
Audit desdaing quoy q̃ fumes occis

B. N. Imprimés — *Cl. B. N.*
L'Epitaphe de Villon en forme de ballade (V. p. 152.)
Gravure de l'édition de Villon de Jehan Trepperel, circa 1500.

①天沢退二郎訳『ヴィヨン詩集成』(2000.9.25 白水社)
②" La Gazette du Canal n° 32 - Histoire"
http://lagazetteducanal.free.fr/n32/n32_hist.html
③François Villon" Œuvres"
Classiques Garnier, 1970, Nouv. éd"

④

目次

吊るされた者の木版画に 12

他人の空

他人の空 8
砂の中には 10
世界中のあわれな女たち
空 16
牡牛よ 17
埃まみれの空 20
行列 22
血について 24
霧 26
死人の髪 28

切り抜かれた空

理解 32
大きすぎる荷物 34
切り抜かれた空 36
帰つて来た小供たち 38
思い出された村 40
見る 43
一回 44
探す 45
途 46
影を背中につけた動物たち 48
言葉について 53
あとがき 57

⑤

私はその建物を、圧しつけるような午後の
雪空の下にしか見たことがない。
富永太郎

⑥

あとがき

この時代にあつては、僕たちの記憶力の薄弱さや、想像力の疎外が、かえつて僕たちの救いとなつているようにも見える。だが僕は、そのゆえにこそ、記憶しておかねばならぬこと、反復して想像しなおさねばならぬことを、一つのイメージとして、文字として、紙片に書きつけることをおぼえた。これが詩と呼称すべきものであろうとなかろうと、ここでその誤算を嘆いたりはすまい。しかし詩にふれることによつて、僕たちは、僕たちの生の途上に立ちはだかる多くの困難さをこえることが出来ると、信じなければならない。

一九五三年十月　　飯島耕一

Ⅴ．年譜・回想

①年譜（『現代の詩人10 飯島耕一』1983.10.20　中央公論社）

昭和十七年　一九四二年　十二歳

四月、岡山二中（現操山高校）に入る。前年十二月八日、太平洋戦争がはじまっていた。中学三年の途中から勤労動員で旭川河口の造船造機工場に行く（それまでは勤労奉仕でよく田植、稲刈り、麦刈りに行き、農村を知った。鋳物工見習として特殊潜水艦の部品をつくっていたが、一つもものにならなかった。しかし工場というものが何であるかを知った。

この頃から戦後二、三年のあいだ食糧事情がわるく、つねに空腹であった。四年になり、陸軍航空士官学校を受ける。級友で陸軍幼年学校をはじめ、陸士、海兵、予科練に行った者が何人もいた。六月二十九日、米軍の空襲により岡山市は壊滅状態となり、自宅も消失した。八月十五日、寄寓先の岡山市近郊庭瀬町で、敗戦の詔勅のラジオ放送を聴く。それ以前、八月十日頃、八月二十日に入校せよという航空士官学校合格の通知を受けとった。しきりに焼け野原となった岡山を歩く。破れた水道管から水が吹き出していた。

昭和二十一年　一九四六年　十六歳

岡山市に戻る。駅前の闇市場の思い出、はじめて見る古いフランス映画、ハリウッド映画の思い出。四月、旧制六高文科丙類に入った。学校の復興資金を集めるため、劇団をつくり、役者となり、岡山県下を旅興行してまわる。小説を多く読む。六高の二年になると、岡山の東端の山にある寺に下宿、同じ寺にいた同級生中島達夫が詩作しているのを知り、自分も書いてみた。中島から西脇順三郎の『あむばるわりあ』『旅人かくらす』（東京出版）をはじめ、多くの詩集を示される。高校の図書館から借り出して朔太郎を読む。当時再版が出た『青猫』を買う。岡山市から汽車で二十分ほどの村に永瀬清子をしばしば訪ね、永瀬清子の詩と、彼女に見せられたシュペルヴィエルの詩（堀口大学訳）の影響を受ける。中原中也を読む。小林秀雄訳『ランボー詩集』に感銘を受ける。

昭和二十四年　一九四九年　十九歳

四月、東大仏文科に入る。同じ六高から同時に仏文に入った栗田勇とよくつき合い、文学的刺激を受け、また多くの人に紹介される。富永太郎を読む。一級下に金子光晴という一高から来た詩人がいて、栗田、金とともに一九五〇年、ガリ版の詩誌『カイエ』を創刊する。『カイエ』を送ったことから安東次男を知り、以後大いに親交を結ぶ。柴田元男らの同人詩誌『詩行動』の創刊に参加、ここで一九五二年に、詩集『他人の空』の原型となる詩を書き、はじめて詩が書けたとの感じをつかむ。『詩行動』の集りで、一度金子光晴に会う。金子光晴の紹介で、国文科在学中の大岡信を知る。

昭和二十七年　一九五二年　二十二歳

三月、大学を卒業、ただちに保健同人社に入り、一年余、厚生省や各病院療養所を駆けまわる。

昭和二十八年　一九五三年　二十三歳

六月、目的もなく、あてもないままに退社。これから何をしようかと迷う。この夏『他人の空』の一連の詩を書き、十二月に書肆ユリイカ（伊達得夫という三十歳を越えたばかりの人が、社長兼編集者で、ほとんど一人でやっていた小出版社）から自費出版した。自費出版はこの時だけで、本が出来た時は嬉しかった。金子光晴と二人で印刷屋に受けとりに行き、祝盃をあげた。二百五十部、費用は作曲家の三木稔（六高で一級下）が、シンフォニーで尾高賞をとり、その賞金の一部をまわしてくれたのだった。『東京新聞』に村野四郎の、『詩学』に大岡信の書評が出た。木原孝一の編集していた雑誌『詩学』から詩の依頼があり、谷川俊太郎、大岡信、中村稔、川崎洋らと出席する。

②「あとがき」（『飯島耕一詩集―他人の空』1971.10.20　山梨シルクセンター）

ぼくの詩の原点ともいうべきものは「他人の空」「砂の中には」「世界中のあわれな女たち」の三篇であるが、これだけのものを書くまでに五年くらいかかっている。一九四七年から五二年までだ。この三篇が書けてようやく詩を書きつづける出発点をつかんだ。

さらにこれらの詩の背景は四五年の敗戦だが、ぼくらが中学生として勤労動員に行っていた河口の埋立地の工場風景がつきまとっている。ところがしばらく前にこの工場のあった場所が空港になっているというのを聞き、最近そこを訪ねてみた。当時を思わせる家が何軒か残っており、川は二十七年前と変らなかったが、こんなところに船で通っていたなどということはまったく夢のようであり、薄気味がわるいような気さえした。何だかなじめない空があり地があった。

③「谷川俊太郎論」（『展望』201　1975.9→『塔と蒼空』1977.2.4　昭森社）

谷川もあるところで書いているが、このときわれわれは何回か、互いの詩をめくって文通した。こんなことはぼくとしてもめったにないことである。このときの谷川の手紙はぼくにとってはなかなか刺激的だった。その後、五四年の夏頃から大岡信が詩論を発表しはじめ、その頃結核療養所にいたぼくは、それをむさぼるように読んで刺激を受けたが、この谷川の手紙もほぼくに影響した。谷川、大岡からは、ほぼ同年の詩人としてこの一九五四年という年にもっとも多くを学んだのである。

このとき谷川俊太郎がぼくにあたえたものは次の一句に尽きる。彼は次のように書いてきたのだ。「雪空はかえって安心出来、晴れた青空ほど恐ろしいものはない」

この「雪空」というのは、ぼくが自分の詩集の冒頭に、「私はその建物を、圧しつけるような午後の雪空の下にしか見たことがない」という富永太郎の詩句をエピグラフとして引用した、その「雪空」のことである（富永の散文詩「鳥獣剥製所」より）。

この谷川の一行に虚を突かれた。

ぼくは空の詩ばかりを書きながら、青空のことを完全に忘れ去っていた。そのぼくに彼は青空、しかも「晴れた青空ほど恐ろしいものはない」という一句を突きつけてきたのだった。

『他人の空』には青空という単語は一つしかない。ぼくはうなだれて歩き、頭上にまるで蓋のように被いかぶさる曇り空を感じていた。青空の日もあったろうが、青空を美しいなどと思ったことは戦後一度もなかったような気がしていた。原爆以後の空なのだ。戦中の空はしばしば美しかった。戦中の青空は匍いつくばるようにして逃げるぼくたちの頭をめがけて、機銃掃射を浴びせてきた。アメリカの艦載機が身をひるがえして去ると、青空は美しかった。夜空はパッと割れて、花火を降らした。空襲の夜空は美しかった。あんなにきれいな花火を見たことはない。限の醒めるような花々が夜空にいっぱいに散らばり、きわめてゆっくりと舞い落ちてきた。ぼくはほとんどうっとりとしていた。その花々は地面に触れるや否や、おそろしい火のバターとなって燃えあがり、地面をなめまわった。油脂焼夷弾だった。その日々から八年経って、「晴れた青空ほど恐ろしいものはない」という一句を聞いたことになる。ここでぼくは青空という語を発見した。

④「夏のための　大岡信とのこと」（『国文学解釈と教材の研究』20(11)　1975.9→『塔と蒼空』1977.2.4　昭森社）

それから「現代評論」という雑誌が出て、清岡卓行と知り合ったのは二十九年の春だったが、そこでも大岡といっしょになった。創刊号に大岡とぼくの詩が並んで出た。その翌年に二十八年十二月に出た『他人の空』の書評を、大岡は雑誌『詩学』に書いてくれ、この書評にも感心した。ぼくは自分のことを書いてくれた大岡の書評に影響を受けたのである。「自分をもっと前面に出せ。客観風に装うよりも」といった意味のことが書いてあった。大岡と真に会った、と言えるのは、このときだったと言えるだろう。それからというもの、大岡・飯島とか、飯島・大岡というふうにいつも並称されるような関係ができてしまった。

⑤「自作について」（『現代の詩人10 飯島耕一』1983.10.20　中央公論社）

遠い遠い思い出を探って、詩を書きはじめた十代の終り頃のことをふり返ってみると、戦後二年目の一九四七年頃、下宿で同じ部屋にいた高校の同級生Nの真似をして、何やら紙に文字を並べている自分の姿が見えて来る。十七歳になって間もない頃である。少なくともボードレールの『悪の華』（村上菊一郎訳）と、朔太郎の『青猫』は読んでいた。フランス象徴派後期というのか黄昏派というのか、月や蝶や他の出て来る影のような詩を書いていたふしがある。ことばを並べ、置き換えることが面白くてならなかったようだ。Nは立原道造風の詩を書いていた。

そのうち岡山市の近くに永瀬清子さんが住んでいるのを知り、彼女に見せた詩は、打って変って午前十時の街頭の風景の詩で、その街の一点において、人々の視線が一つにまじり合う輝かしい一瞬を定着しようとしたものであった。ユナニミスム風と言うのだろうか、その詩はちょっと気に入っていた。初恋の詩もいくつか書いた。

十九歳で東京へ出て来てからはテーマが変って戦争のイメージの詩となった。加藤周一らの紹介で、フランスの対ナチ抵抗運動の詩を読んだ影響がつよかったと思われる。戦後四年目だった。海底にいまも巨大な軍艦が沈み、「怨嗟の声はそこからこだまして」「造船工場の赤ちゃけたタービンには／ひからびた海藻と　砂粒と／かさなるように匍っている」といったものを治びせてきた。アメリカの艦載機が身をひるがえして去ると、青空は美しかった。夜空はパッと割れて、花火を降らした。空襲の夜空は美しかった。あんなにきれいな花火を見たことはない。限の醒めるような花々が夜空にいっぱいに散らばり、きわめてゆっくりと舞い落ちてきた。ぼくはほとんどうっとりとしていた。その花々は地面に触れるや否や、おそろしい火のバターとなって燃えあがり、地面をなめまわった。油脂焼夷弾だった。その日々から八年経って、「晴れた青空ほど恐ろしいものはない」という一句を聞いたことになる。ここでぼくは青空という語を発見した。

の、造船工場というのは、中学時代に勤労動員で通った造船工場から来たものと思われた。

次には金子光晴、富永太郎、安東次男の影響のあらわなー連の詩を書いた。そしてあれは一九五二年、二十二歳の時、「空と汗」という当時としては全力投球の長い詩を、『詩行動』の最後の号に発表した。この時、何かがつかめたような気がしたのを覚えている。

（「空と汗」第一連まで引用）

これが「空と汗」の「Ⅰ　暁のレクイエム」の三分の二ほどの引用で、このあと「Ⅱ　汗ばんだ隼」「Ⅲ　ゆうべれの印刷女工のレシタティヴ」「Ⅳ　海豚の夢」と続き、全体で八十行足らずの、わたしとしては劃期的に長い詩であった。「印刷女工」の出て来るところは、ランボーの『ジャンヌ・マリーの手』の影響だった。

やがて翌五三年の夏、この詩をもとにして、『他人の空』の一連の詩を一、二カ月の間に書いた。わたしは二十三歳になっていた。「空と汗」は、ようやく空というテーマを発見した、わたしとしては記念すべき詩だった。それまでは海中、海底のイメージが多かったのだ。

ともかく『他人の空』以前に、数年間の手探りの、暗中模索の時代があった。二十歳前後のことで、『カイエ』や『詩行動』の詩の集まりに行くのが楽しくてならなかった。

⑥「作品ノート」（『飯島耕一・詩と散文』1　2000.10.5　みすず書房）

Ⅰは二十代前半の詩集『他人の空』（全）と、『わが母音』からの四篇で構成した。

『他人の空』も『わが母音』も故伊達得夫が編集者兼社主として、たった一人でやっていた書肆ユリイカからの出版だった。

『他人の空』の原稿は、銀座松屋裏のスエヒロ近くにあった、その頃の彼の事務所に届けたが（安東次男の紹介だった）、その日のことは今もよく覚えている。一九五三年の夏の終りのある午後だったと思う。机上には山本太郎の『歩行者の祈りの唄』の原稿が、うず高く（そのように見えた）積んであった。わたしの処女詩集の原稿の量はそれに較べるといかにも少なかった。伊達は一枚一枚、原稿をめくって、時間をかけて全部に限を通し、三十歳を越えてまもない年だったのだが、重々しく「いいでしょう。やりましょう」と言った。こちらは緊張していた。二十三歳の時で、その年十二月十五日に二百五十部限定で刷り上がった。頒価は百八十円。自費出版だった。表紙はフランソワ・ヴィヨンの詩による何かの文学史に載っていた絞首台の絵で、しかし深刻な図柄ではなくユーモラスなそれで、社主自らが更にそれをデザインした。『他人の空』は今回、「帰ってきた子供たち」という作品の子供が「小供」となっているのを「子供」と直した以外は、一九五三年の初版『他人の空』のままに復原した。

Ⅵ．詩行動」発表作品から

①「夜」（「詩行動」1号　1951年12月）

そこの知れない夜であった。
一群の動物たちは
なまあったかい風をともなってここを過ぎ、
ときおりかいまみる月光に
僕はとおく
海を飲み干している。
この地上に
すべて美しいものは拒まれよう。

海底には
巨大な軍艦が沈み
怨嗟の声はそこからこだまして、
造船工場の赤ちゃけたタービンには
ひからびた海藻と　砂粒と
かさなるように匐っている。
――がらんどうの風景に垂れさがる
夜の雲のむれむれよ。

むざんにも顔をもぎとられた女どもは
季節はずれのタンポポのごとく
すさまじい哄笑をまきちらして
陥穽をはすかいに踊ってゆく。
ああ
くちごもる
不信の歌よ。
くずれおちる
つちくれよ。
ただ囚われの街はしんかんと
けものの身をよこたえる。

②「月明の下で」（「詩行動」2号　1952年1月）

中島達夫に

牡牛よ！
屠殺場の柵にもたれ
おまえは　最後の草を　食んでいた。

かの善良だった山椒魚よ！
おまえは　そのいかつい頭蓋を割られ
血のりにまみれ　葡つている。

むらがり
しめつける蜘蛛の手は
顔をもたない追跡者！　人よ
おまえの穢れた咽喉首は　蠍の腹でくびくくれ。

心臓よ　怯える心臓の不整樽音は
蛙の五つの指をひらいて
あるおそろしい予感にひたされている！

――月は明るい
月はあの大洪水以前にくらべ
いささかたりとその光を弱めていない。

牡牛よ　屠殺場の柵にもたれ
おまえは　最後の草を　食んでいる。

今宵　わすられた死者たちは
過ぎた日の苦がい追憶を噛みながら
タンゴに腕を　ゆすつている。

③「影を背中につけた動物たち」（「詩行動」4号　1952年3月）

……ひそやかに　まるで夕暮のようにやつてきて
燭台をたおして行つたのは　誰？
二つの影が　ふいに壁に大きくゆらめいた。
曇り硝子の水族館の窓に
おまえの渦巻いている髪は海藻のように揺れて、
おまえの両眼はまひるの熱帯魚のように光つて……
消えてゆく……泡
てんてんとしたたる
血の色の
菫……
（やもりはそこに白い腹をぴつたりとつけて
ひそひそとささやいて）

突然！
声もとどかない距離が
おそろしい予感の網を投げる。
そこにひきさかれるのは僕たちの二つの影。
僕たちの小さな額は
カインの末裔だ。
昨日癒えた傷口に
ふたたび負うた裂傷は
開かれたはなびらのように。

ふと　石畳の坂道をかけ過ぎる
足早やの動物たち。
その背に
くだけた
たまゆらの水晶の光……
（かれらは追放されたノアの時代の
影を背中につけた動物たちのようだ。）

だまつて
二つの影は一つにかさなり、
僕たちはわすられた行方不明者のように
そしてとおいあの日の海鳴りの記憶に
わなないている
僕たちの
薔薇色の心臓をゆする。
難破した汽船の
破れた艙口（ハッチ）のように。

上の方では
四〇年の死者たちの
苦がい追憶に眠られぬ声……
下界では
都市と村落と、そしてくすんだ灰色（グレイ）の屋根と
ふたたびつけはじめた石の表情（かお）
沈黙をしか語らぬ
おびえたような石の花……

曇り硝子の水族館の窓、
海藻のように揺れる渦まいているおまえの髪、
おまえの両眼はまひるの熱帯魚のように光つて、

ああ
燭台をたおしたのは、そして
まるで夕暮のように立去つたのは
誰？

④「金子光晴論」（「詩行動」5　1952年4月1日）

いきるためにうまれてきたやつらにとつて、すべてはいきるためのことであつた。
それだのに、やつらはをかしいほどころころと死んでいつた。（引用者注、「泡」［詩集『鮫』所収］）

これは詩句とは云い難いかもしれない。まさしく詩的表現ではない。前述のように彼の死には生（なま）な言葉、散文のきりぬきに等しい部分が著しい。しかもこのようなあからさまな彼の説明乃至は意見が、彼の詩を陳腐なもおとしていることも蔽いがたい。しかしそのことはおいて、これらの言葉はいま不幸にもいたいたしい実感を加えて、われわれの切実な問題となつている。作家とはつねに自らにとつて、同時に他のすべてを予想して、最も重要で、根元的な問題に謎をかけるものであろうが、時代現実、社会現実の（戦争に最も端的にあらわれた）愚かしいことどもに眼を塞いでいることのできなかつた、そして自己の安定した秩序、独立した、いわばヴァレリイ的世界の中に逃げこんでいることのできなかつた（批評家としての）金子の、社会的責任を自覚した態度。たとえその詩が発表できなかつたにせよ、われわれはそこに読みとらねばならないだろう。彼の詩の役目は、『落下傘』のあとがきどおり、事実まだまだこれからのものらしい。

詩を書くという行為がひとつの苦役であり、この現実に生をえらんだ、われわれの自己証明、苦がい存在証明の普遍化であるとすれば、それだけわれわれの立つている状況が不幸だということだ。或る意味ではわれわれの詩は不毛をのみ約束され、運命づけられている、という言い方すら不自然でなくなつてくる。けれども、この激動する苦難にみちた現実を、エマニュエルの云うように、ひとつの人間性の偉大な神話にまで高めることこそ詩人の役目であるとすれば、「今日の世界における人間の位置の理解にこれまでもつとも接近したものは詩のなかにある」（一九五一年の精神「ロンドン・タイムス」）とすれば、「おちぶれた薔薇」を再び花咲かすために、この世界を意味あるものとするために現実を再構成する作業こそ詩であるとすれば……われわれが最も警戒しなければならぬのはこの灰色の風景を当然の気候だと錯覚したり、徒らな敗北主義に陥没することにほかならない。詩とは世界とつねに闇から光に向うものだということを頑強に信じることこそ詩人の特権ではあるまいか？

⑤「言葉について」（「詩行動」9号　1952年8月）

彼らは首くくつた家鴨のようにうなだれていた。
ながい休息の時間から見捨てられたので……
影をつけたビルの窓々にいて、
彼らは鳥のいない烏龍のように吊るさがつていた。
親しかつた幾つかの顔とさよならをして……

僕は、七月の日の光と青空を
追つかけて歩いた。
破れて穴のあいた舗石を踏んで……
僕は
大声で歌つて歩いたのだつた。
大声で言つてはならない　ひとびとの薔薇の言葉を……
（こんなによくない時代であつたから）
ひとびとは鶏のように眠つたふりをして、
だが決して忘れたことのなかつた言葉を。
影をつけたビルの窓々にいて、
燠（おき）のように消えることのなかつた言葉を。
長い抽出しの中で羽搏いている
風と炎と鳥たちの明日の言葉を。

でも彼らは枯れた樹木の腕のように蹲まつていた。
小さな獣らの足跡は踏みにじられたので……
彼らは、曲つた鉄骨の上の赤い信号旗のように疲れていた。
ねじまげられた数えきれない言葉のことを思つたので……
再び　おそろしい軍靴の響きを聞いたように思つたので……

それは、すべてのものらが
ながいながいお祈りをあげているような午後だつたので……

⑥「えらばれた態度」（「詩行動」10　1952年9月）

けれどもエリエアールが、「抱擁と信じ合う心はながく残る」とうたつたとき、それは僕たちに、ともすれば翳ろうとする生への欲求と、今日に生きているひとびとへの信頼をたぎらせることができるだろう。それは、ともすれば僕たちの内部にあつて眠つていた真実を喚びさます声となることができるだろう。よい意志は生きている。詩人が読者に信じられたとき、はじめてその言葉は生命をふきこまれることができるだろう。

現代詩が捉えなければならないのは、そしてひとびとに語りかけねばならないのは、まさしくそれであろう。態度とはそのようなものなのだ。

（中略）

どうかして、自らを、またひとびとをもよい意志に向わせるような詩を一篇でも書きたいと願つている。

⑦「中原中也小論」（「詩行動」12　1952年10月）

彼がこれらの詩を書いていた時代、これは一般の市民の生活はまだまだ安穏なものだとはいえ、来るべき満洲事変を用意していた、血なまぐさい不安の時代であつたわけである。（中略）

血を吐くやうな倦うさ　たゆけさ

中原中也が、なんとしてもとどめがたい倦怠の中に陥没して行つたのは、たといその気質の故のみであつたとしても、そのような時代の背景の中でであつたことは知つておいてよいだろう。

かくて今では朝から夜まで
忍従することのほかに生活を持たない、
ただ夏の昼の青々した木蔭は私の後悔を宥めてくれる――

ものだ。

これが中原のかわらぬテーマとなる。

詩人はつねに屢々偏執的にいちばんよい世界をしか望みはしない。彼はこの時ユートピストとなる。詩人の純粋、或は完全欲は現実をこえた抽象的なとおいところにしかない。うしなひし夢、そして失われた永遠への願望、本質的不在に苦悩する詩人にとつて、

あれはとほいい処にあるのだけれど
おれは此処で待つていなくてはならないのだ。（言葉なき歌）

⑧「秋の日の思想」（「詩行動」12号　1952年10月）

今日の日常に憔悴した魂は
今日のネクタイピンの貪婪な眠りである……

ぎいぎい軋る吊革の列をすかして
われらは　部屋に
玉葱のにおいの
ぎつしりと
女の髪毛のようにつまつているのを嗅いだ。
夕日は　部屋の
壁の　剥げちよろけた額ぶちの金泥にあつた。
金泥は……血の色、
だが月曜日の
麺麭は乾いて
われらの　泡立ち乾きゆく　希望とも見えた！
血……

血はきよらかな八月の明け方のイメージ。
背中に滴たる
あたらしい樹液のイメージ。
それはわれらの　苦い肉体の運河に流れた。
われらは夥しく流された　たたかいの黒い血の中に生きた……

この濁つた河は　ヴオルガ・ドンを知らない。
風は　駱駝と包の国を知つているか。
われらの足音は　北京の上ではない。
われらは今日　ふたたび
回々教の寺院のごとき日本の秋に漂うのである。
われらは　われら自身の足音の
未来につながつて谺する場所を求めるのである。
われらは地に伏して
風の　枯れたとおもろこしの葉裏に吹き去るのを聞くのである……

⑨「血について」（「現在」1952年10月）

ぎいぎい軋る吊革の列を透かして　われらは　羽毛のない鶏のように吊る下つたまま、部屋に　玉葱のにおいの　ぎつしりと女の髪毛のようにつかまつているのを嗅いだ。夕刊には政治家のカリカチユールがあつた。夕日は部屋の壁の剥げちよろけた額縁の金泥にあつた。金泥は血の色……　だが月曜日のパンは乾いて　われらの泡立ち乾きゆく希望をも見えた。われらは　おびただしく流され　黒い血の中に生きた。われらは　もうながい休息の時間から見捨てられた。

血……血はきようから八月の明け方のイメージ。背中に滴たる　あたらしい樹液のイメージ。それは　われらの　若い肉体の運河に流れた。

ぎつしりと　だが女たちの髪毛は　やがて去年と同じ月光の下で夏草と獣らのにおいを放つた。われらは貧しい黒い甍の屋根のつらなりを見た。あるおそろしい兆しに　われらの血はざわめいた。風は　枯れたとおもろこしの葉裏に吹いた……

⑩「路」（「詩行動」19号　1953年6月、原題「路々」）

その重圧は傾く深海のようであり、
やがて一人の男がはぐれたひよどりのように、
仲間を探している……
その重圧の中にいて、
二進も三進もならない、だがばら色の誇りは
すでに彼のものだ。
行列に遅れそう……彼は
行列に遅れそう……
歩いては

ときおり
片腕とれた　塑像のごとく立ちすくむこと。

行列は　不思議なことに
みんな背中を　コの字型の階段のように
ねじまげて
それぞれ実にたくさんのガラス板を背中に括りつけて……
それが実にきらきらと耀いて
（頭巾とヅダ袋とカタパンの列のように）
もう誰が誰だか見分けることなんか出来はしないのだ。

《ええ、ガラス、ガラス売り
ういっとぅりえ、ういっとぅりえ……》

行手は　ひるまだか
夜だか
皆目見当のつかぬ明るさだ……
地上は
だんだん、
くらい
扁平な
壷の内側のようにせばまり、
やがて娼婦の骨盤のうるわしい凹地に滅亡する……

だが見ると
その彎曲した入口には
ぎつしりと干潟に組まれた漁夫たちの足場が沈下し、
鋼鉄の防潜網は
マ・ン・ボ・ル・ン・バを踊り、ゆらゆらと揺れ動き……
ああ
水中に
すでに拒否の腕をもたげた
水中花を探せ……

探せ。
そこに
まだ生きていたおそろしく逞しい魚が
ぱっくりと血の色の口を開け、
勇敢に
根気強く

しかも巧みな角度から
その錆びついた針金をボロボロに噛み砕こうとするのを探せ。
行列よ
片方の眼を理性のごとく高くあげ、
まひるの燈台のように
帽子のひさし深くおろして探せ。
探せ。行列の
心臓や
胃の腑を、
おしつつんで流れる体液のように――
くろぐろと未来につらなる路を。
彼らの通る路々に朝鮮にんにくのにおいは流れる。
路は五月のプラカードの文字のごとく花開く。
路に菜の花と
プラカード……
プラカードは
ただ
できるだけ
できるだけ
できるだけ
正当に生きようと……
行列はちまたにビルとビルとの黒い断絶の河をおおって流れて。

ああ
探せ。
《彼らの通る路々に花が一時に開く。そんな……》
そんな言葉を路々に
探せ……。

＊　ういっとぅりえ……ガラス屋、ジャン・コクトオのガラス売りのイメージを想起すること。
＊　《彼の通る路々に花が一時に開く、そんな》……ロオトレアモン「マルドロオルの歌」より。

⑪「現代詩の再生」（「詩行動」20　1953年7月1日）

僕たちはエリエアールのどんな一行にも、この現実の恐ろしい状況から、〝更に高く見るために〟理性の目を上げ頭を上げる一人の男の、出来得るかぎりに純粋なものとされ、肉体のリズムそのものと同質であろうとした声を聴きわけることが出来るのだが。僕たちは彼の〝光輪でつつまれた〟としばしば形容される言葉。その同一性によつてほとんどものの本質を指示するように見える言葉。新しい意味でみたされた言葉。すべてのものに共通な声となつて拡がつて行く声を、空の拡がりに沿つて、破壊されたものらの内部に拡がつて行く声を聴きわける

ことが出来る。

詩人がもし今日に生きようとするならその主題には政治に関らないものは何一つないという事実に注目するがいい。それ故、詩は政治に優位であるとか、政治上のある目的のために詩が参劃するといつた論議ほど無益なものはないといえる。「詩はひとりによつて作られるものではない」ということ。今日の詩の主題は大衆に与えるものを、再び大衆にかえすところにあらねばならぬということ。それは詩が純粋であることと何ら抵触はしないだろう。純粋詩という固定された詩はどこにもないのだ。そして僕はもう一人の詩人ピエール・エマニエエルの「生命の最高の緊張を絶えず維持するということは、政治を超える」といつた言葉を思うのだ。（自由はわれらの歩みを導く）

「荒地」の大部分の詩人たちの意思する社会性も、彼らの孤独、破滅などのある程甘美な観念をモメントにした自己愛（ナルシシスム）の変形にしか過ぎず、彼らの政治に対する偏見はまず救いがたく深い致命傷であることを指摘するにとどめよう。

「腐敗した世界」と詩人は不用意に書く、しかし腐敗したのが詩人の眼でなければよい。幻滅というまことに都合のよい、あいまいな観念でつくりあげる今日的雰囲気に幻惑されて彼ら自身、まつたく自ら作りあげた荒地的気候の中にぬくぬくとおさまつているのでなければよい。だがそれは日本の根無草のようなインテリゲンチヤにとつて、もつとも似合つた服装なのだ。そしてそれはわれわれの内部にも案外根強く巣食つているしようのない奴なのだ。努力しよう——

実際努力するよりはかに手はないのだ。

芸術的な村野氏はかつて「私は軍用道路という言葉を用いるにしても、その詩の風景に必要な小道具としてしか用いない」といつた論旨のことを書いていたが、その言葉が、彼のフオルムに対する厳しさを語るものであるにせよ、これまた終焉すべきリアリズム——新即物主義の救いがたい限界を、そのあたりに発見できそうである。現実を正確に、彼流のザツハリツヒに定着するという作業が成功すると同時に、その現実がピンで固く止められ、停止してしまいそうなこと。つまり云い方をかえると、舞台装置は見事に完了した。実にがつちりと必要な道具立は全部あるべきところに配置された。幕があがつた。だが劇は始まらない。不動のままなのだ。その時観客はその見事な装置を前にしてどんな反応を示すだろう。高い木戸銭を拂つて……

⑫「空と汗」（「詩行動」22号　1953年9月）

私らは空を描かねばならぬ。
空は私ら自身なのだから……

Ⅰ　暁のレクイエム

空——
空はいつでもおれたちの上にあった。
目がさめると　とつぜん真夏がやって来たこともある。
おれたちは向日葵のように明るい空の下で、
汗ばんだ雨傘を　サーカスのようにふりまわした。
空は　仲間のようだった。
そしてああ　きみたちは知っているだろう。
堕ちた空、牛乳色と血の色ながれる空、
ひとたちが破壊にのみ執した　おそろしい空。
それはもう久しいことだ。
崩おれた空は　細長い　砂囁（すなさぼ）のようだった。
あれら　暁の空の色は——
そうして空はだんだん涙ぐんで来る。
絨氈のような　可哀そうな空、
不器用な空——空よ
おまえはためらいがちに　だが口を開くだろうか、蝕ばまれた
おまえの肋骨の地平線から……
何よりも愛することだと、
すべて生ける者らに平等な　この暑さを愛することだと。
紙風船のように　遠のいて行く
近づいて来る　記憶たちを。

空よ——
何よりも　免れるのだと。
そこ此処の灼けた路上にむき出しの
人間たちの不幸に慣れることから免れるのだと。

不幸から免れるために、
人間たちは不幸の核心に更に深く這入りこんで行った。
空の拡がりに沿って
真珠色のツブツブの汗。汗は
おそろしいほど青ざめた水中のひとでの林を覗きこみながら、
拡散して行ったことであった。

Ⅱ　汗ばんだ掌

夏の日の　まだ青い麦穂のように、
ひたすらに汗ばむ掌
汗ばむとはどういうことか。
若い男の肩先に　濁っているまひるの蹠（あうら）。
濁っているにごり江の上を、
風の指は　ふいに
辿ることを止めた。それとも
男の長い手が差出されたのだったかしら。

ひとたちには
埋（うづ）めることだけが習いだったから……
ひとたちの周囲にとりついて離れることのなかったものたちを、
その汚れた耳元にささやいて、
埋めることだけに執していたから……
事件のない日々のなかで……
すべてのことが事件であるような日々のなかで……

Ⅲ　ゆうぐれの印刷女工のレシタティヴ

さそりの指……ほっそりした
その銀の線。
（私の指は黒い。なぜかしら？）
けれども私は年来の仲間である　活字の硬さに代替された私
の希望、
私の黒ずんだ指先を憎もうか。
それともおし黙ってしまった　もろもろの「正義」たちを。
だが　私らはすでに油のにじんだ腰掛を愛したので
一日の騒音の中で、コンクリの床は暮れるのみだ。一枚のカレ
ンダーのように。

汗は刺青（いれずみ）した達ましい男らの背中に消え、
コンクリの床の上で、私らの分割し得ない夢は、
あまりに重い、そして軽ろやかな指を伸ばす。

伸ばされた指——
一房の葡萄に似た私らの乳房。
私らの
沈黙したゆうぐれの輪転機は、もっとも多くを夢みる。

（ふるさとの山には　吾亦紅（われもこう）が花開いたかしら。
トロッコは一日、山襞をつたって疾走したかしら。
雨に洗われて垂直にそそり立つヒマラヤ杉と空のあわい
を。）

指を伸ばして私らは若い踊子のように、
ゆうぐれの巷に溢れ出す。
今宵、もやっているボオトは昆虫の頭している。
私らよ、
葉末のように揺れている
にごり江の落日を過ぎて……。

Ⅳ　海豚の夢

右投げをする子供たちは去った。海藻を採る
乳房の大きな女たちもいない。
急に　日没が空に迫った。

海豚は海をしきった堀割の中で、
とおい海鳴りを聞いた。高い木柵に向って、
彼はいったい何を喚（よ）んでいるのであろう。
だが　急に日没が空に迫った。

⑬「すべての戦いの終り」（「詩行動」23号　1953年10月）

Ⅰ　他人の空

すべての戦いのおわり、彼らの上にある空。
汗ばんだシャツ、他人の空、不幸な空。
もう流れ出すこともなかつたので……
血は空に
他人のようにめぐつている。
生きのこつた戦士たち、
彼らは一人一人　袋の中から脱け出す。
土色の
だぶだぶの袋。
そうして雨上りの鋪道を駈けて行く。

茶褐色の鋪道は　方々で
大きな口を　忘れたようにあけていて、
プラタンの梢は死んでいた。

鳥たちが帰つて来た。
地の黒い割れ目をついばんだ。
見慣れない　屋根の上を
上つたり下つたりした。
それは途方に暮れているように見えた

空は石を食つたように頭をかかえている。
物思いにふけつている。
拿捕された船が　船着場にもやつている。
（夜が、まもなく船窓をコツコツとたたくだろう。
たたいても、たたいても
夜どおし灯はつかない。見張人さえいない。）

Ⅱ　砂の中には……

砂の中には
豆の木とジャガイモが生えている。
彼は探した。地に落ちた親しい顔を、
つぎに
失くなつた自分の顔を。
（古い記憶は　ひるまでも
肩先きに　悪い鳥たちのように
慄えながら　止まつている。）

僕は見る。夜になると——
生きることに悪い目的が重なり合つていた
ひと日ひと日を。
あらゆる物らが耳元をかすめて流れて行くのを
漂う黒い雨傘が　低い電柱のあわいを
仰向いて、流れて行くのを……

若い梢のように腕（て）をあげていた　僕らの上に、
オレンジ色の暁が

レールの上を走つて来た朝！
死んだ小さな戦士、
僕らは
野ら犬のように　穴の中で
不器用に足を折りまげたまま
泣いた

Ⅲ　世界中のあわれな女たち
〈夜のくらがりにいつまでも愛する者の
面影を切に想い描くことをやめよ〉
J・シュペルヴイエル

黒ずんだ帯状の水、
濁つた繋船場の水。
漂う海の泡が
ひと目集まつて来るように
しやがんでいる女、
柵にもたれて佇つている女。
若い女、年とつて少し黒ずんだ女。
（なかには肌着まではだけたのもいる。）
おそるべきことに
この数年来
不動のままでいる。

女たちは　あの
金網の張つてある
建物を知つているかしら？
時々そちらの方を
覗こうと
立つたり坐つたりするのがわかる。
何かを期待しているそぶりも
見えないのに。

女たちは手に抱えている、
竹を籠んだ小さな籠。
籠の中には紙片があり、
紙片には文字が書いてある。
だが私らには読めない文字で……
（籠には、玉葱や
チーズの塊りを入れるものなのに……）

黒ずんだ水の中で、
どうしたのだろう。
女たちのもどかしさ、
一体　どんな理由があるだろう？

一人一人ひつそりと向き合つて……

家に帰ればいいのに。十年も前から
世界中のあわれな女たちの厨房には、
灰が、ぎつしりとつまつている。

Ⅶ．引用

①フランソワ・ヴィヨン「絞首罪人のバラード」（（天沢退二郎訳『ヴィヨン詩集成』（白水社　2000.9.25）

おれたちの死後を生きてゆく人たち　わが兄弟よ
おれたちに心つめたく閉ざさないでくれよな
もしおれたちを哀れに思ってくれたら
神様だってあんたたちにずっと早くお慈悲を下さるだろう
ごらんの通りおれたち五人、六人、ここにくくりつけられている
ふんだんに栄養取らせたこの身体も
ずいぶん前からぼろぼろにちぎれ、腐っちまった
そしておれたち骨はといえば、灰になり塵になるのさ
おれたちのこの苦痛　だれも嘲笑わないでくれよ
どうぞや祈ってくれろ　神様のお許しがあるように。

あんたたちを兄弟と呼んだからって
怨まないでくれ、たといおれたちがお上の手で
殺されたにしても尤も、ご存知の通り
人は皆がみな、よく考えて賢く行動するわけじゃない
おれたちゃ、もう死んでるんだから
とりなしてくれよ　マリア様の息子さんに
恩寵が涸れることなく
地獄の雷からおれたちをお護り下さるように
おれたちは死んだんだ　もういじめないでくれ
どうぞや祈ってくれろ　神様のお許しがあるように

おれたちを雨が滌いでは洗い
日光が乾かしては灼き焦がした
カササギやカラスども、おれたちの眼をえぐり
ひげや眉毛をむしり取った
おれたちゃ一ときも気が休まらぬ
あっちへぶーらこっちへぶーら　風の変わるまま
指貫よりも孔だらけのこの身体は
風の気の向くままに揺れなびく
だから　間違ってもおれらの仲間にはなるなよ
どうぞや祈ってくれろ　神様のお許しがあるように。

すべてを見そなわすイエス様、
おれらを地獄が取り込まないようお護り下さい
とにかく地獄とは縁もゆかりも持たぬようにしよう！
人々よ　もう冗談は抜きだよ
どうぞや祈ってくれろ　神様のお許しがあるように。

②富永太郎「鳥獣剥製所」

私はその建物を、圧しつけるやうな午後の雪空の下にしか見たことがない。また、私がそれに近づくのは、あらゆる追憶が、それの齎す嫌悪を以て、私の肉体を飽和してしまつたときに限つてゐた。私は褐色の唾液を満載して自分の部屋を見棄てる、どこへ行くのかをも知らずに……

煤けた板壁に、痴呆のやうな口を開いた硝子窓。空のどこから落ちて来るのか知ることの出来ぬ光が、安硝子の雲形の歪みの上にたゆたひ、半ばは窓の内側に滲み入る。人間の脚の載つてゐない、露き出しの床板。古びた樫の木の大卓子。動物の体腔から抽き出された、軽石のやうな古綿。うち慄ふ薄暮の歌を歌ふ桔梗色の薬品瓶。ピンセットは、ときをり、片隅から、疲れた鈍重な眼を光らせる。

私はその部屋の中で蛇を見た。鷲と、猿と、鳩とを見た。それから日本の動物分布図に載つてゐる、さまざまの両生類と、爬蟲類と、鳥類と、哺乳類とを見た。

かれらはみんな剥製されてゐた。

去勢された悪意に、鈍く輝く硝子の眼球。虹彩の表面に塗つてあるのは、褐色の彩料である――無感覚によつて人を噛む傷心の酵母。これら、動物の物狂ほしい固定表情、怨恨に満ちた無能の表白。白い塵は、ベスビオの灰のやうに、毛皮の上に、羽毛の上に、鱗の上に積もつてゐた。

私は、この建物に近づくまいかといふ逡巡に、私自身の手で賽を投げなかつたことを心から悔いた。が、すべては遅かつた。怖ろしい牽引であつた。私を牽くのは、過ぎ去つた動物らの霊だと知つた。牽かれるのは、過ぎ去つた私の霊だと知つた。私はあらゆる世紀の堆積が私に教へた感情を憎悪した。が、すべては遅かつた。

私は動物らの霊と共にする薔薇色の堕獄を知つてゐた。私は未来を恐怖した。

さはれ去年の雪いづくにありや、
　さはれ去年の雪いづくにありや、
　さはれ去年の雪いづくにありや、
……意味のない畳句が、ひるがへり、巻きかへつた。美しい花々が、光のない空間を横ぎつて没落した。そして、下に、遙か下に、褪紅色の月が地平の上にさし上つた。私の肉体は、この二重の方向の交錯の中に、ぎしぎしと軋んだ。このとき、私は不幸であつた、限りなく不幸であつた。

一つの闇が来た、それから、一つの明るみが来た。動物らは、潤つたおのおのの涙腺を持つて再生した。かれらは近寄つて来た。歩み、這ひ、飛び、跳り、巻き付き、呻き、叫び、歌つた。すべての動物が、かれらの野生的の書割を携へて復活した。出血する叢や、黄金の草いきれが、かれらの皮膚を浸ひたした。これは、すさまじい伝説的性格の饗宴であつた。私はわれからとそれに参加した。そして、旧約人のやうにかれらを熱愛した。平生から私に近しかつた蛇が、やはり一ばん私に親密であつた。かれは、その角膜の上に、瑪瑙の嬌飾に満ちた悪意を含めて、近々と私の眼をさし覗いた。鷲は……ああ、長々しい、諸君が動物園に行かれんことを！　とにかく、私は慰められてゐた……

このとき、私は、下の方に、浚渫船の機関の騒音のやうな、また、幾分、夏の午後の遠雷に以た響を聞いた――私のために涙を流した女らの追憶が、私の魂の最低音部を乱打した。私は、私が、鮮かな、または、朧ろな光と影との沸騰の中を潜つて、私の歳月を航海して来た間、つねに、かの女らが私の燈台であつたことを思ひ出した。私は、かの女らが、或るものは濃緑色の霧に脳漿のあひまあひまを冒されて死んでしまつたり、或るものは手術台から手術台へと移つた後に、爆竹が夜の虹のやうに栄える都会の中で、青い静脈の見える腕を舗石の上に延ばして斃死したり、または、かの女らが一人一人発見した、暗い、跡づけがたい道を通つて、大都会や小都会の波の中へ没してしまつたことを思ひ出した。殊に、私が弱くされた肉体を曳いて、この世界の縁辺を歩んでゐるやうに感じ出してこのかた、かの女らは、私の載つてゐるのとはちがつた平面の上に在つて（それが私の上にあるのか、下にあるのか、私は知ることが出来ない）、つねにその不動の眼を私の方へ送つてゐたことを思ひ出した。私は、退屈な夜々に、かの女らの一生を、更に涙多きものとするために、私のために流された涙の、一滴一滴を思つて泣いた。が、かの女らの眼は冷く、美しく、剥製された動物らのそれと、その無感覚を全く等しくしてゐた。私は心臓が搾木にかけられたやうに感じた。

私は努力して、私が、日本の首府の暗い郊外にある、或るうらぶれた鳥獣剥製所の一室にあることを思ひ返した。私は、このみすぼらしさの中に、魔法の解除を求めようとした。（私は動物らの饗宴から逃れゝば、これらの眼から逃れられるものと信じてゐた。）私は、あの窓を、床を、卓子を、古綿を、ピンセットを、ありのまゝのみすぼらしさに於て見た。が、なんといふすばらしい変位だらう！　これらの物象は、そのみすぼらしさのまゝ、動物らの喚び出した燦々とした書割の中に溶け込んでゐた。さうして、その輝かしさの一合唱部を歌つた。さうだ、あれらのみじめな物体は、もうそれ自身輝かしかつたのだ。私は、自分をその輝かしさに堪へないやうに感じた。

動物らに至つては、もう私は何ともすることが出来なかつた。かれらは、蜜蜂の唸りのやうな饗宴の度を高めて、私のまはりに蝟集した。私は、かれらが剥製されてゐるのでなく、天然の背景の中で、生きた眼を持つて活動してゐるのだつたら、こんなことにはならなかつたらうと考へた。私は剥製術といふ悪徳を呪つて身を悶えた。が、何も変らなかつた。私はもうすべてを変改しがたいものと諦めた。そして、自分の身を、この音と光と熱との過度の狂乱の中に投げ出した。

私は、先刻からの追憶が、みんな、この動物らの燥宴の中で見続けられて来たことをもう一度考へた……ああ、こゝにもまた、そこにも、熱の無い炎のやうなかの女らの眼。時間によつて剥製され、神秘な香料によつて保存されたかの女らの眼。私は、このとき、これらの眼が、あの動物らの霊とちがつた世界から出て来たものでないことを悟つた。そして、動物らの霊と同じく、その苦痛に満ちた魅惑の力を永久に私の上から去らないであらうと悟つた。

かう考へたとき、私は腹立たしく、狂暴になつて、かの女らの眼に一つ一つ唾を吐きかけた。さうして、新しく泣いた。なにもかも消えた――或は、闇が来たのだつたかも知れない。燥宴はすべての光と熱と音とを失つた。が、あれらのすさまじい揺蕩の一々は、空気分子の動揺として、私の皮膚に、そのありのまゝなる消息を伝へた。私は、温泉場の浴場の周囲を流れるやうな、生暖い、硫黄の臭気を持つた液体が、この私の居る建物の周囲を流れるやうに感じた。また、それは、私の皮膚のまはりを流れてゐるやうでもあつた。私はそれを弁別しようと努力したがどうしてもわからなかつた。私は、黒い眩暈の中に、更に一つの薔薇色の眩暈を認めた……

……流水よ、おんみの悲哀は祝福されてあれ！　倦怠に悩む夕陽の中を散りゆくもみぢ葉よ、おんみの熱を病む諦念は祝福されてあれ！　あらゆる古日本の詞華集よ、おんみの上に、明障子に囲はれたる平和あれ！……新らしい眩暈に屈服するためにか、或は、さうでなくてか、私はこの時宜に適はぬ訣別の辞を、何とも知れぬものゝ上に投げかけた。動物らの魅惑は、また下の方から上つて来るであらう。炎上する花よ、灼鉄の草よ、毛皮よ、鱗よ、羽毛よ、音よ、祭日よ、物々の焦げる臭ひよ。

さはれ去年の雪いづくにありや、
　さはれ去年の雪……いづくに……
さはれ去年の……Hannii ― hannii ― hannii ― i ― i ― i ― i ……
bidn ! bidn ! bidn !

私は手を挙げて眼の前で揺り動かした。そして、生きることゝ、黄色寝椅子の上に休息することが一致してゐるどこか別の邦へ行つて住まうと決心した。

③ジュール・シュペルヴィエル／堀口大學訳「沖の小娘」より

船べりに肱ついて夢想する船人よ、夜のくらがりに、いつまでも愛する者の面影を切に想い描くことを休めよ。さもないと君たちは、水また水の寂しさに取巻かれたる唯中に生み出す不幸を見るであろう、この、もとより人気のない場所に、人間の五感のすべてを具えながら、しかもなお、生きもならず、死にもならず、愛することも出来ず、とは言え、生くるがごとく愛するがごとく悩み傷み、かつまた常にまさに死なんとする臨終にあるような哀れなる一人の者を。一日、四本マストの貨物船、豪胆丸の甲板水夫、スティンヴォルドのシャルル・リエヴァンスが、さる航海の留守の間に喪ったその年十二の愛娘の上を想うこころの切なるあまり、ここ北緯五十五度、西経三十五度の海原に生れいでて、永遠に自らの不運を欺く、この沖の小娘のごとき一人の者を。

＊飯島が読んだのは『ノアの方舟』（1939.2　第一書房）もしくは『ノアの方舟』（1946.9　齋藤書店）か
引用は『シュペルヴィエル抄』（1992.3　小沢書店）による

Ⅷ．先行説から

①安東次男「飯島耕一の詩」（「今日」2　1954年10月）

たとえばヴイヨンに寄せる序詩をぼくが注目するのもそこだ。このなかには、たつた一箇所ではあるが、彼自身でも無意識に発見したものがある。つまり「吊るされた木版画の二人が　手を前で組み合わせて　はだしでいるのに気づく日」というところだ。この「気づく日」は、同じ詩のなかでも、そのほかの「日」とはちがつているようにぼくには思える。そのほかの「日」は一つ一つ過去へ向つて巡礼してゆく飯島の「日」だろうが、ここは未来の発見がある。そして、飯島が、この過去へ向けられた目のなかから、この一つの宝石をとりだしたことは、飯島の置かれた現実のなかで彼の正しさ、詩人たるゆえんを語つているものと思う。

②大岡信「書評　飯島耕一詩集　他人の空」（「詩学」9(3)　1954年03月）

『他人の空』を読みおえたとき、ぼくはこう思ったものだ。「しかし飯島耕一の空はどこにあるのだろう?」。もちろん、他人の空こそ飯島の空なのだが、他人の空に自分の空を認めるということは、どういうことだろう。ぼくはこの点を手がかりにして、飯島の制作意図を想像してみる。それはおそらく次のような二つの互いに相反する意味をもった言葉の共存で表現されるだろう。

「私の空は今日、他人の空のよそよそしさしかもっていない。」
「私の空は他人の空でもあり、二つは互いに互いをわかちあっている」（飯島が引用したエリエアールの「生きるとはわかち合うことだ」という詩句を思い起されたい）。

飯島はこの二つの意味を同時に満足させる一つの世界を作ろうとしたのではなかろうか。別の言葉で言いかえてみよう。「ぼくらの世界はもはやぼくらに無縁である。それほど世界は疲れ、ぼくらも疲れた。しかし、それ故になおぼくらは世界を支え、世界はぼくらを支えねばならないのだ……」

もしぼくの想像がそれほど不当なものでないならば、飯島の意図はそのアイロニカルな態度において、正当に現代的であるといってよい。だが、他者に自己を仮托して自己表現することは、恐らく愛を媒介とする時以外には、ほとんど常に世界の相対性の中に自己を埋没する結果に終るものだ。

たとえば飯島に「空」と題する詩がある。

空が僕らの上にあった年。
目がさめるととつぜん真夏がやって来た年。
汗ばんだ雨傘をサーカスのように
ふりまわした年。
砂くちばしのように
空が垂れ下ったり拡がったりしはじめた年。

この詩をどのように解釈しようとも、ぼくには一つのことだけは明らかなように思われる。それは、ここでは感動の所在が不明であり、したがって批評精神もまた眠っているということだ。詩において絶対的なものは感動だとぼくは信じている。この点の詩において、飯島は即物主義の悪影響を示している。この点は、『他人の空』と『切り抜かれた空』との二つに大別される詩集のうち、即物的な態度をとり、対象を定着することによって行為の主体である自己のおかれた状況を浮彫り的に表現しようとしているらしい『他人の空』一連の詩においてかなり露骨に現われているところだ。飯島の試みは価値あるものだが、意図のゆえに作品も正しいとすることはできない。ここではいくつかの詩が造型意図の破綻を示している。その端的なあらわれは、飯島の引用への好みであろう。サブタイトルに幾人かの詩人の詩句が引用されているが、飯島がたとえそれらの詩句によって触発されたにもせよ、問題はそれを頭上に頂くことではなくて、その詩句の世界を飯島のものとして造型することにあろう。こうした謙譲は飯島のためにならないとぼくは思う。

それなら飯島の空はどこにあるのだろう。ぼくはさきに愛を媒介として、と書いた。長々しい議論はここではできないが、一つだけ必要なことを書かねばならぬ。それは、愛は透視力を与えるということだ。いいかえれば、詩人にヴイジョンを与えるということだ。それこそ『切り抜かれた空』における飯島の一種童話的な愛の詩が、『他人の空』一連の詩よりも遙かにリアルであることの理由である。そしてここではじめて飯島は飯島自身の空を見出している。そしてそれは、ぼくには当り前のことだと思えるのだが、おまえとよばれた一人の女性の空、つまり他人の空だったのだ。秀作「切り抜かれた空」をふくむ一連の『切り抜かれた空』の詩篇は、『他人の空』ではみられなかった飯島の別の資質をよく表わしている。それは言葉の軟かい部分に触発されてすぐに動きだすように見える、ナイーヴで柔軟な感性である。時折り正確さを見失うこともあるにせよ、これは貴重な資質である。ぼくはこの資質が、さきにのべた即物主義的であろうとする試みを必然的に呼びだしたものだろうと思うのだが、この二つのものがやがて統一されることを飯島のために希望したい。そういう意味では、中国から帰国した子供たちを歌った「帰って来た子供たち」などは、すでに飯島の新らしい道を明らかに示唆しているようにぼくには思われる。（引用は『飯島耕一詩集』1［1978.1.15　小沢書店］所収の「飯島耕一・詩のありか　1」による）

③岩田宏「飯島耕一論」（『今日の詩人双書6　飯島耕一詩集』1960年1月　書肆ユリイカ）

かれらはこうして空や土や真夏の太陽に特別の愛着を感じないわけにはいかなかった。それらは親しい友人であり、同時に危険を多量にふくむいわば内通者だった。どこかしら神秘的で、しかも日常的な裏切者やスパイのイメージが、当時の中学生たちの心にこびりついていた。それは一方では強制されたイメージであり、他方ではきわめて日常的な心理傾向だった。戦争はすべての人間を戦闘員と非戦闘員にわけてしまうが、非戦闘員のなかでは、逆に年寄りと子供の区別は曖昧になる。年寄りは子供のように食物に卑しくなり、子供は年寄りのように賢く、用心ぶかくなった。そして、戦争の大義名分に絶望的に陶酔するには若すぎ、戦争の現実を見逃してしまうには年取りすぎていた当時の中学生たちは、非戦闘員にのみ許された茫漠たる自由のなかで、ギラギラと思春期のまなざしを研ぎすましていた。逼迫した時代にあって、賢いとは、つねに本能的な警戒心を眠らせぬことであり、異常なまでに感覚的であることである。当時の中学生たちは、ほかのいかなる時代の中学生よりも、するどい純粋な感覚を四六時中働かせていた。かれらは決して戦争に馴れなかったし、八月十五日以後も、だれよりも平和になじめなかった。その筈である。かれらは初めから平和を知らなかった。たとえば飯島耕一は一九三〇年（昭和五年）の生れだが、日本帝国主義が満洲で戦争を始めたのは、その翌年、昭和六年のことである。

詩集『他人の空』成立のきっかけとなっているものは、そのような暗号解読の鍵として飯島耕一の世代に映じた戦争のイメージである。そして主体的には、そのイメージは一種の貧血症として詩人の肉体に消化吸収されている。詩集の表題にえらばれた作品「他人の空」を読んでみよう。

（「他人の空」引用）

見慣れない屋根がならぶ地に対置されて、空は鏡のように詩人の上にあり、物思いにふける詩人を映している。詩人自身の血は、つめたい鏡のなかで、よそよそしく循環している。自己と他者をむすぶ人間的なもののシンボルとしての血という概念は、この詩集のなかに頻繁に出てくるが、肝心なのは、その血の循環を眺める詩人の放心の姿勢であろう。貧血で倒れる人が、めまいの瞬間、ふと自分を客観的に眺めるように、詩人は感情移入された空を茫然と見つめている。この放心は、もちろん飯島耕一の世代の専売ではない。けれども、このような放心を物質化して、完成度の高い作品に仕上げたばかりではなく、放心そのものを自己と他者との積極的な関係を証明するための手段と考えたことは、この世代の特徴であると思われる。飯島耕一はここで全く新しい問題に直面しなければならなかった。すなわち、ある世代に共通した疾患である貧血状態のなかで、新しいメタフィジックを創り出すこと。放心を理解にまで変質させること。それは、たとえば「荒地」の詩人たちが「人間と事物に関するあらゆる自明性」（田村隆一）に傷つけられたあとでは、不可欠にして緊急の問題でもあったのである。

④平出隆「解説」（『現代の詩人10 飯島耕一』 1983.10.20 中央公論社）

飯島耕一の処女詩集『他人の空』は一九五三年十二月、書肆ユリイカから刊行された。わずか六十頁はどの薄い詩集だが、週刊誌サイズの大きな判型で、表紙には木版画がつかわれている。これはフランス十五世紀の詩フランソワ・ヴィヨンの詩集『吊るされた者たちのバラード』に付されたものからとったという。

この版画に触発されたらしい上の詩篇が、詩集の序詩として位置している。ここには、現実の悲惨の中で声を奪われた人々を見つめて、その傍らに立とうとする、飯島耕一の希望の原型があらわれている。声にならなかった声が「見えて来る」という、感覚の意図的な混淆をとおして、「インクを探す」詩人の意志が、虐げられた人人の生につながろうとみじろぎしている。飯島耕一という詩人の人間主義的な姿勢を、早くも印象づける一篇。

詩集『他人の空』は序詩「吊るされた者の木版画に」を除いて二章に分けられ、一章「他人の空」に同題の詩篇をふくめて十篇、二章「切り抜かれた空」に同題の詩篇をふくめて十一篇が収められている。「理解」はその第二章の最初に掲げられている。

第一章の作品と比べて明瞭なことは、語りの質が、詩人の内発的な声そのものに近いことであろう。第一章が事物に即したイメージの展開に特徴を示した、そのために多義的な読みへ導くのに対して、第二章の詩句からは、詩人の語りたいことが柔軟なイメージに包まれながらも、明快に伝わってくる。

⑤高柳誠「廃墟の〈空〉からの出発―飯島耕一『他人の空』試論」（「論叢」29 1989年3月 玉川大学文学部）

『他人の空』初版では、「序詩にかえて」と副題がついた「吊るされた者の木版画に」を除く二十一篇が、「他人の空」の表題の、同題の詩から「死人の髪」までの十篇の一章と、「切り抜かれた空」の表題の、「理解」から「言葉について」までの十一篇の二章とに、作者によって分けられている。事実、一章と二章とでは、その発想主題・スタイルともに、微妙ではあるが、截然とした差異が見られる。一読して気づくのは、スタイルの違いだろう。スタイルと言うより、もっとはっきり限定してリズムの違いと言った方がよい。

一章では、原型となった作品があり、それを凝縮し削除することによって新たな作品としたものが多いこともあって、そのリズムは、決してなめらかとは言えず、むしろゴツゴツしている。例えば、最初の「他人の空」の文末表現を見てみると、第一連では、「帰って来た」「ついばんだ」「下がったりした」「見えた」と過去形を重ね、第二連では、「かかえている」「ふけっている」「めぐっている」と現在形を重ねることによって、作品にリズムを生み出しているのだが、そのリズムは、むしろ極めて単調である。そして、「鳥たち」「地」「空」「血」といったことばも、まるで〈元素〉のように剥き出しのままそこに置かれている。勿論、この単調な（と言うよりむしろ無骨な）リズムが作品の要請によることは言うまでもない。つまり、この無骨とも言えるリズムが、こうしたことばの〈もの〉としての実在感、造型性を確実に支えているのだ。逆に、なめらかなリズムの中に置かれたら、これらのことばは、〈もの〉としての陰翳を失ってことばの響きの中に流れ去ってしまったであろう。また、一章では体言止めが頻出することも、このことの証左となろう。以前引いた「空」は全篇体言止めによって書かれていたが、次の「砂の中には」にも、以上に述べた特徴が見てとれる。

一章の彫琢するようなリズムに比べて、二章のこれらの作品（引用者注、「理解」「大きすぎる荷物」「帰ってきた子供たち」）のもつリズムは、より柔軟で自然な、いわば呼吸のリズムに近いものになっていることが理解できよう。一章が、戦後に対する飯島の苦い認識の反映もあって、凝縮した根源的、原型的な表現をとるのに対して、二章は、ナイーブな感性が生み出す、より柔軟で自然な具体的イメージに満ちている。飯島の作品は、その語法や論理的脈絡において決して平易ではない。にも関わらず、わたしたち読者のうちに、実に安々とそのイメージを定着させ、その詩的論理を受け入れさせるものこそ、この、飯島が生得的に備えているリズム・テンポなのだ。このリズム・テンポはそれぞれの語が自然のうちに内包しているものを、飯島の感性を通して自発的に顕現させたものであろう。この自然なリズムが、読者のうちに飯島耕一固有のポエジーを呼びおこすのだ。こうした固有のリズムの最初のあらわれこそ、二章の作品のうちに見られる。このリズムを清岡卓行は「歩行のリズム」と呼び、「詩における言葉の流れのリズム」は、「時として、詩人における現実と夢のかかわり方そのもの、一種の無私を感じさせる詩人の根源的な生の歩みそのものを、自然に伝えてくるようにも思われた」と書いた。

この二篇（引用者注、「探す」「途」）は、「見る」「一回」という作品とともに、いわば短篇連作という形で、二章の中でも独特の小世界を形成している。「探す」、「途」という表題からも明らかなように世界と自分との繋がる道を探し出そうとする気配にみちた連作である。そして、世界と自分とが繋がる通路こそが、本質的な意味での〈ひと〉なのである。ここで、「おまえ」「一人の女」と呼ばれている存在が、一章に現れた「彼」「人たち」「女たち」「君」といった人称とは明らかに異質な、特定の〈ひと〉を示していることは言うまでもない。それは、激しい違和にみちみちた世界と自分とを繋ぐことができるかもしれぬ唯一の通路（「一つしか途はない。」）を提示できる存在である。しかしまだ、そうした存在とは決定的には出会ってはいない。ただ、「まちがいなく出会う」予感は強くしている。「探す」の一連から明らかなように、「おまえ」と「僕」はそれぞれに孤立した別の存在である。孤立した存在であるからこそ、〈ひと〉を通して世界に繋ぎ止められたいという熱い希望を持つのである。だからこそ、「その途についてすでにおまえは考えはじめている」のだろう。この二篇の二連同士は、奇妙な程一致した印象を与える。全く同じ内容を別の角度から述べたにすぎないと言ってよい。あれ程違和を抱いた対象であった世界との繋がりを求めて、飯島はもう一人の〈ひと〉を探す方途を真剣に考え始めたのである。